

「東日本大震災に思いをはせる」会を開催しました

2018年12月8日に、愛知県岩倉市にある私設図書館「えほんのもり」で、岩倉市教育委員会のご後援のもと、「東日本大震災に思いをはせる」会を開催しました。

まず、「えほんのもり」を代表して伊藤俊彦が挨拶を行い、この3月に妻とともに岩手県釜石市にある唐丹小・中学校を訪れ、中学校の卒業式に出席したことを紹介しました。卒業式終了後に控室で高館千枝子さんの心づくしのお弁当をいただき、談笑していたとき、卒業生たちが担任の先生に伴われて訪問してくれました。そうして、ひとりずつ挨拶してくれたのですが、涙ぐんで言葉につまる生徒さんもいて、彼らが震災によって被った苦しみや悲しみ、震災後に彼らが過ごしてきた時間、さらには将来への意気込みなどが思われて深い感動を覚え、微力でも力になればと思ったことをお話ししました。

ところで、この会を開催したきっかけは、そのときに高館さんから「鎮魂の歌 巡礼の旅」を「えほんのもり」で開きたいというお申し出をいただいたからです。「えほんのもり」では以前から唐丹希望基金の活動に関わってきたご縁もあり、喜んでお受けすることになりました。

最初に報告していただいた堀泰雄さんは同基金の副代表であり、高館さんとともに被災・児童生徒の支援を続けておられます。堀さんはまた、日本エスペラント協会や世界エスペラント協会の理事を務めた世界的に著名なエスペランチストです。被災地を80回近くも訪れ、被災地の状況を日本語はもとより、エスペラントを駆使して世界に発信し続けておられ、それらはまたさらに各国語に翻訳されて、多くの人々に読まれています。今回、堀さんには、震災直後と現在の写真を多数示しながら、現地報告、復興の状況をお話しいただきました。

その後、はそうの合奏で、高館さんの歌に合わせて「東日本大震災犠牲者に捧げる 鎮魂の歌」を参加者全員で合唱しました。

次いで、高館さんがお話をされ、支援活動のなかでどんなことを感じたか、ご自身の生き方が活動を通してどう変わってきたかなどについて語ってくださいました。そうして、2020年に唐丹小・中学校の全児童・生徒に支援金を渡すまでがんばるとともに、それ以降も見守っていきたいと決意を語られました。

冷え込みが厳しい日でしたが、総勢 36 名の参加者で狭い会場はいっぱいになりました。東日本大震災の発生から 7 年余が経過し、だんだん関心が薄れてゆくなかで、おふたりの粘り強い活動の報告は参加者に大きな感銘を与えたことと思います。今回も募金箱を上がり口に置いて協力をお願いしたところ、みなさんから多額の募金をいただき、感謝にたえません。

開催に先立ち、高館さんには岩手県から、堀さんには群馬県から、また、基金の活動に精力的に関わっておられる山川節子さんには東京からそれぞれ駆けつけていただき、東日本大震災について、また、ご自身の生き方についての会話を通して、生きる力を与えてくださったことを感謝申し上げます。

なお、最後になりましたが、「えほんのもり」では、12月2日から9日まで、「えほんのもりの展覧会」を行っており、その準備・運営に忙殺されて、何かと行き届かぬ点がありましたことをお詫び申し上げます。